

聖書:ルカの福音書9章18~27節

説教:自分の十字架を負って

はじめに

イエスが語ってくださったみことばの中で23節は、世に広く知られてるみことばの一つでしょう。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従ってきなさい。」

これを読んでまじめな方は考えるでしょう。自分の好きなことや考え、計画、自分がしたいこと、いっさい全部捨てないとキリストについていくことができないのか。そんなことできない。そんなふうになんか悲しくなったり不安になった方もいるでしょうか。結論から言いますと、安心して下さい。イエスはそんな意味で言ったのではない。ではどんな意味なのか。これから一緒に考えて参ります。

1 ペテロの告白

1) 一人で祈っておられたときに

18節。「さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。『群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。』」

まず、「イエスが一人で祈っておられたとき」ということばに注目します。イエスはいつも熱心に祈っておられたのだろう。そんなふうになんか納得して済ませてしまうかもしれません。でも、イエスにとって祈ることは当たり前のこと。わざわざ書くほどのことではない。こう書くのには何か特別な訳があると考えべきでしょう。それは何か。

2) 「神のキリストです」

イエスは弟子たちにこう尋ねます。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」イエスがご自分のことを世間でどんなふうになんか言われているか知らないはずはありません。むしろ本当に尋ねたかったのは次の質問でしょう。20節前半。「あなたがたは、わたしをだれだと言っていますか。」ほかの人の意見ではなく、あなた自身はどう思っているのか、というのです。

日本人は、自分の意見を積極的に発言するのが苦手だと言われます。それはある面では美德とも言えることかも知れませんが、しかし信仰に関して言うならば、いつまでも他人事では済まされない。

いつかは、自分のこととして「あなたはどう思うのか」と問われるときが来ます。

その点、ペテロは物怖じしない。はいと手を挙げて自分の意見を堂々と述べる。「神のキリストです。」

3) 受難と復活の予告

21節。「するとイエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じられた。」意外に思いませんか。ペテロは、神学校の試験で言えば百点満点の答えをしたのですから、皆の前で「よく言った」とほめてもらっていいはず。ところが、誰にも言うなというのです。

なぜだろうか。そのことはまた後で考えるとして、続く22節でいきなり話題が変わってしまう。「そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。」

この箇所は「受難と復活の予告」と呼ばれて、ルカの福音書の中ではここともう一箇所18章31節以降の二回出て来ます。このことについて、弟子たちは初めてイエスの口から聞かされました。イエスが一人で祈っておられたのは、十字架とよみがえりのことを弟子たちに告げる、その備えのために祈っていたのだらうと思われまます。でもなぜ祈る必要があったのでしょうか。淡々と事実を語ればよいのではないか。なんだかわからないことだらけです。23節以降になにかヒントがあるかもしれません。

2 イエスのことば

1) 自分を捨てる

「イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」いくつかの疑問を解く鍵が23節にあるかと思えば、なんだか関係のない話が出てきて戸惑います。でも、まったく別のことを語り出すはずはないですから、何か関係があります。

さきほどイエスが弟子たちに質問したとき、真っ先に手を上げて答えたのはペテロだということを思い出してください。その関係からいくと、この23節は実はペテロのことを語っているのではないか。そのように考える根拠があります。「自分を捨て」ということばに注目します。これは自分の意

見、自分の欲望、自分の計画、それら全部を捨てることと思っただけかもしれません。しかし、このことばがもう一度出て来るところがある。皆さんもご存じ、イエスが逮捕され、大祭司の家に連れて来られたとき、ペテロはこっそりと隠れて様子を伺っていたときのことで、22章56, 57節。「ある召使いの女が、明かりの近くに座っているペテロを目にし、じっと見つめて言った。「この人も、イエスと一緒にいました。」しかし、ペテロはそれを否定して、「いや、私はその人を知らない」と言った。」

ここの「否定する」が、この「自分を捨てる」と同じことばなのです。

2) 日々自分の十字架を負って

これは偶然ではありません。イエスはペテロがやがて「私はその人を知らない」と言って否定することをあらかじめご存じなのです。そうすると、次の「日々自分の十字架を負って」はどういうことか。ペテロは、イエスを捨てて逃げた後、自分の故郷に帰り漁師の生活に戻ります。そんなふうにして湖で漁をしていたとき、よみがえられたイエスに再会し、「ヨハネの子シモン。あなたはわたしをわたしを愛していますか」と問われたとき、ペテロはこうこう答えるのです。「はい、主よ。私があるあなたを愛していることは、あなたがご存じです。」弟子たちの間でもリーダー格でありながら、イエスを否定し逃げたペテロが、そんなことも忘れて「あなたを愛している」と言っているのか。そうではない。イエスが「あなたはいのちを捨てるほどにわたしを愛しているのか」と尋ねられたとき、ペテロはごく控えめな言い方しかできない。「あなたのことが大好きです。」それは「あなたのためにいのちを捨てることなどできない私でした」と告白しているのと同じ。ペテロがこのような告白を三度したとき、イエスは「わたしの羊を飼いなさい」と親しく語ってくださいました。イエスを否定し、裏切ったにも関わらず、そんな自分を赦し、大切な神の羊をゆだねていただいたと、ペテロは思ったでしょう。こんな私をも愛して下さるイエスを私は否定した。それが彼の生涯にわたる十字架となっていきました。

3 神の国を見るまでは

1) 神の国とは

今日の箇所に戻ります。このとき、ペテロはそんなことになろうとはまったく知らず、自分は大丈夫だと自信満々です。イエスが27節でこう言われた

ことを、手放して喜びながら聞いたでしょう。「まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国を見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

このところの解釈についてはいろいろ議論があつて難しいと言われていました。しかし、分かることをひとつひとつ積み上げていけば、自然に理解できるのではないのでしょうか。

わかっていることの一つ目。弟子たちは永遠に生きたわけではない。全員死にます。ということは、弟子たちは死ぬ前に神の国を見たことになる。これはかなり重要な出来事なはずですから、聖書のどこかにそのことが書かれていなければならない。ところが、どこを捜しても神の国を見たという話しが出てこない。

イエスは嘘を語ったのか。そうではなくて、神の国とは何か、そこを誤解しているから聖書に出てこないように見えるだけ。実は、イエスはすでに語っていただきました。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコの福音書1章15節) イエスご自身が「神の国」と考えたのでしょうか。でも今日の前にいるのに「近づいた」と言うのはちょっと変です。「近づいた」というのですから、目の前にあるようだけれど、まだ来てはいない。そういうことでしょうか。ではいつ来るのか。イエスは、ご自分が十字架で死なれ、三日目によみがえられるということ、弟子たちに明らかにされました。「神の国」とはなにか。死に打ち勝つよみがえられたイエスこそ、「神の国」の現れではなかったのか。もしそうであるなら、弟子たちがよみがえりのイエスに出会ったとき神の国を見ることになりました。

2) イエスに従う歩み

なぜイエスは、だれにも話さないように命じられたのか。そのことが最初の問いかけにありました。ペテロは確かに正しい答えをしました。しかし、それはまだ頭の知識に過ぎません。自分を捨てて自分の十字架を負い、そしてよみがえられたイエスに出会ったとき、初めて心から「あなたは神のキリストです」と告白できる。頭の知識はほとんど意味がない。心から言える日がまで待たなければならないのです。

では、自分を捨てるにはどうしたらよいのか。結局、疑問はそこに戻ります。ペテロのことを見てください。「自分を捨てて」と言われたので、努力して自分を捨てたか。違います。追い込まれて、急に怖くなったとき、心の奥底にあったものがさ

らけだされ、気がついたらイエスを否定し、自分がかつて告白したことばを捨てていた。そこで初めて、いかに自分が罪深いかに気がついていったのです。とても努力などでできることではない。

こんな私たちのためにイエスは何をしてくださったか。この方は神ですからご自分を否定することはありません。その代わりに、人々に捨てられ、十字架を背負うことになりました。死からよみがえられて、神の国を弟子たちに見せてくださいました。

それなのに、私たちはイエスを裏切り、捨ててきました。私たちが追うべき十字架はそこにあります。重い十字架でしょうか。いいえ。一人で負うのではないのです。主がともに負ってください。本当の恵みがある。主の不思議な救いのみわざに感謝します。